

藤木 俱子（ふじき・ともこ）

1、プロフィール

俳人。村上しゅらに資質を見出され、翌年しゅらが発行人を務める「北鈴」と小林康治主宰の「泉」に入会。その後、康治の「林」創刊に従い入会。康治の死後「たかんな」を創刊、主宰。風土を叙情豊かに詠む俳人として評価が高い。

<生没>

1931(昭和6)年7月 21 日～2018(平成 30)年 10 月 25 日

<代表作>

第一句集『堅香子』(昭和 57)以降第十一句集『星辰以後』(平成 31)まで句集は 11 冊。他に『私の歳時記・貝の歳時記』(昭和 63)『恋北京』(平成3)などがある。

<青森との関わり>

八戸市に軸足を置きながら、中国との国際交流や日本全国の俳人や結社と俳句交流を行い、県俳壇のレベル向上に貢献した。

2、作家解説

1931(昭和6)年、青森県八戸市に生まれる。

昭和 52 年、実家である「吉田産業」の職場俳句会「日新俳句会」に顔を出したのがきっかけとなり、指導に来ていた村上しゅらにいち早く才能を認められた。翌年、風土俳句の拠点として全国に名を馳せていた「北鈴」に、また石田波郷の流れを汲む「泉」に、どちらもしゅらの勧めで入会する。昭和 56 年に北鈴新人賞を受賞。その後、「泉」を出た小林康治が創刊主宰した「林」に入会。作句歴5年で第一句集『堅香子』を上梓する。昭和 59 年には第一回林俳句賞を受賞する。

昭和 63 年、句文集『わたしの歳時記・貝の歳時記』を発行。

平成4年、小林康治が死去し「林」は終刊となる。翌年「たかんな」を創刊、主宰となる。「林」から引き継いだ会員も多く、構成員は全国的に散らばる。

平成7年、たかんな訪中団を組織して北京を訪問し「日中俳句・漢俳交流会」を共催する。平成9年、たかんな5周年記念大会に劉徳有氏を記念講演に招く。平成14年、有馬朗人氏を講師に招く。15周年に鷹羽狩行氏の講演。知名度や実際の広さを生かして、積極的に「たかんな」と青森、八戸を全国に発信し交流に努めた。

毎日新聞社刊『俳句あるふぁ』『現代俳句の300人』に選ばれたほか、「古今秀句80」には〈あかつきの雲割る声や白鳥来〉の句が採用された。角川学芸出版『極めつけの名句1000』には〈えんぶりや雪の鍛冶町大工町〉と〈年の市まぶしきものの売られけり〉の2句が掲載された。

平成13年に八戸市文化賞を受賞。俳人協会の評議委員を始め、数々の役職を持ち、県内外の俳句大会の選者を務めた。平成30年5月、句集『星辰』により「文學の森大賞」を受賞。同年7月、「たかんな」の名誉主宰に就任し、10月25日に八戸市内の病院で逝去した。句碑は八戸市の八戸公園内に〈無垢の瞳となり寒林を出できたる〉が1基ある。

句集は『堅香子』『雁供養』『狐火』『竹窗』『栽竹』『火を蔵す』『淅淅』『清韻』『無礙の空』があり第十句集の『星辰』は平成28年に刊行された。平成31年には、辞世の句までを収めた第十一句集『星辰以後』が刊行されている。著書は他に『自註現代俳句シリーズ・藤木俱子集』『自解100句選 藤木俱子集』『花神俳句館 藤木俱子』などがある。